

地域子育て支援拠点研修事業〈長崎開催〉

〈開催要項〉

- 開催日 平成 23 年 12 月 11 日（日）10：00～16：30
- 会場 長崎大学（教育学部）
- 主催 財団法人こども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省・（社福）全国社会福祉協議会・長崎県・長崎市・長崎大学
長崎女子短期大学・長崎県社会福祉協議会・長崎市社会福祉協議会
- 協力 NPO法人インフィニティー
- 参加者数 216名（男性16名、女性190名）
（行政37名、NPO・任意団体96名、その他団体・企業25名、その他58名）

〈プログラム〉

- 開会挨拶・主催者挨拶
財団法人こども未来財団 前中寛之さん
- 開催地代表挨拶
NPO法人インフィニティー 理事長 野口美砂子さん
- 来賓挨拶
長崎市長 代読 子育て支援課課長 田中紀久美さん

◆プログラム1 基調報告『地域子育て支援拠点事業の概要と展望』

講師 里平倫行さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室

ひろば事業は平成14年から国庫補助事業として始めた制度だが、平成20年に児童福祉法、社会福祉法の第二種社会福祉事業に位置付けられるまでの規模になったのは、地域から湧いた事業だからではないかという意見と説明を頂きました。また、今後の新しい取り組みとしての「子ども・子育て新システム」については、これからは各地方自治体が責務を負うシステムであるとの説明がありました。必要な場所に必要なものができるように、PDCAサイクルで有職者、地方公共団体、当事者、労使、NPOなどが政策を作るプロセスに参加する「子ども・子育て会議」の内容や、今後5カ年のビジョンと具体的展望を伺いました。



◆プログラム2 基調講演『地域子育て支援拠点事業における活動の指標

「ガイドライン」について』

講師 橋本真紀さん 関西学院大学教育学部准教授

最初にガイドラインの策定経緯を話して頂きました。地域子育て支援事業が第二種社会福祉事業として法的な位置づけになって行く過程を説明して頂き、独立した事業として継続していくための実践者共有の手立てとして作られたのがガイドラインであることの説明がありました。

ガイドラインの中身については、当事者の声を国に届けるために必須な事業実施要綱を多くの現場の実践者が知らないことに気づき、基本的な考え方や、「子どもの最善の利益」をキーワードとした支援者の役割、場づくりからプログラム作成、信頼関係づくりに至るまでの心理的プロセスを具体的にご説明して頂きました。

◆プログラム3 分科会

〈第1分科会〉『みんながすごしやすい、居心地のよい拠点作りのために』

【講師】橋本真紀さん 関西学院大学教育学部 准教授

【事例報告】野口美砂子さん NPO法人インフィニティ 理事長



居心地のよい拠点とは何かを「人的環境」「物理的環境」のふたつの面から見て頂き他の拠点の人と意見を交わし、所属する拠点に活かすことをねらいとしてワークショップを行いました。

最初にワークショップでのルール説明をし、「居心地のよい」という定義が様々な中で、自分が「居心地のよい」ということを「人的」な面から拠点としてどのように心がけているか、また、心がけたいかを書き出しました。そしてグループ内のブレインストーミングで各意見をグルーピングしてタイトルをつけ、グループごとに発表しました。

全体に共通したキーワードは「信頼」「挨拶」「安心」「仲間」が多かったのですが、一方、別の角度からは「それは誰の居心地か？」と考えると、心がけ方も違うことなどがわかりました。

野口さんの事例報告では、企業から管理運営の委託を受けて開催している親子の集う広場「長崎シビックホール」の事例発表をして頂きました。行政からの資金支援は一切なく、5年間で子どもの新規登録者8,800人に利用されている背景、拠点事業に取り組んだ理由、ここでの「居心地のよい環境配慮」について発表がありました。人が育ち合う「間(ま)」を心がけていたら、自然に昔の日本家屋の配置のような空間と『幼老共生』の空間が出来上がりました。人材としては他団体、地域、企業、大学、行政等のつながりのほか、場所を運営するスタッフも、既に子育てを終えた年齢に達した「ばばボラ」「G(じい)メン」、利用者でもあるスタッフ「ままボラ」、「育メンズ」などが自然発生し広がりを見せ、受動的でなく能動的に自分の出番をつくることで居心地のよい空間を自分たちで創り出しているという内容の発表でした。



次に、「居心地がよい」と思う「物理的」側面からのワークに取り組みました。各グループの発表後、橋本先生から「関西学院大学子どもセンター」の事例報告と共に居心地の良い場について整理をして頂きました。

①迎え入れる②環境の理解と活用を助ける③情報を提供する④親であること、個人であることを支える⑤つどうきっかけを提供する⑥やすらぎを提供するなどの配慮と、所属する拠点の強み(ストレングス)に着目することの大切さについて、事例を交えながら発表して頂きました。

〈第2分科会〉『拠点スタッフの役割、スタッフに求められる力』

【コーディネーター】 奥山千鶴子さん NPO法人びーのびーの 理事長

【コメンテーター】 小原達朗さん 長崎大学教育学部 教授

【事例報告】 増本小夜子さん 長崎市西浦上地区子育て支援センターびよびよ センター長

【事例報告】 小川由美さん NPO法人アンジュ・ママン 施設長



分科会のねらいと進行について奥山さんより説明があり、「最近嬉しかったこと」についてのアイスブレイクで心と頭がほぐされたところで増本さんに事例報告をしていただきました。「長崎いのちの会」の発会から支援センターを運営するまでの背景、概要を説明して頂き、実家のような支援センターづくりのために来訪者の相談・聞き役、繋ぎ役や、初めて来た人への配慮で心がけていること、スキルアップを図る為に月1度の情報交換や、年1回の勉強会、研修会を実施していることなどの報告がありました。ママ同士の繋がりが見られる成果として利用者のことを「びよらー」、センターに行くことを「びよる」と

いう言葉も生み出されたそうです。

次に大分県豊後高田市から小川さんに「アンジュ・ママン」の事例報告をして頂きました。平成15年に市長自らが子育て支援を計画し、女性ワーキンググループが作られ、子育てに関する十分なリサーチをした上で結成されたプロセスと、活動内容をお話しして頂きました。利用者がスタッフに気遣うことのない配慮をすることや、スタッフが問題を一人で抱え込まないようにすること、初心を忘れず方向性を統一しておくことなどを心がけているとのことでした。



事例発表の後は、グループワークを通して、スタッフの役割、求められる力のキーワードをそれぞれに話し合い発表しました。最後に小原先生より、対象となる0～2歳の子どもの養育環境の大切さを生理学的な角度からお話しして頂きました。その子どもを育てるお母さんに対しては「受容」と「要求」のバランスが必要であることを説明とともに、この「受容」と「要求」をスタッフは演じて分けることがスタッフに求められる力であることをお話し頂きました。

〈第3分科会〉『さまざまな地域子育て支援のかたち』

- 【コーディネーター】 柴田恒美さん NPO法人子育て談話室 理事長
【コメンテーター】 郷野和代さん 長崎県子ども未来課地域子育て支援班 係長
【事例報告】 本田裕子さん 壱岐子どもセンター
【事例報告】 櫻井英子さん NPO法人子どもと女性のエンパワメント佐世保 理事長
(親子広場よんぶらこ)



最初に本田さんに療育支援と子育て支援の複合施設である「壱岐子どもセンター」事例報告をして頂きました。離島の状況説明、事業に至るまでの経緯、スタッフの役割分担、法律に乗らないグレーゾーンの子どもへのサービス、支援年齢の幅、料金設定など様々な課題はあるけど利用者は増えているとのことでした。

次に、櫻井さんに商店街の中で運営している「親子広場よんぶらこ」の事例報告をして頂きました。TVで取材されたVTRを流した後、自主保育団体と一緒に月1回の外遊びやアレルギー相談など様々な活動の内容をお話しして頂きました。

その後、グループワークに入り「わが地域の子育て支援活動、取り組み自慢」を付箋に書き出しグループ内で共有しました。次に「これからやれそうな子育て支援活動」についても同じように書き出し、共有しグループごとに発表しました。



発表後、郷野さんより宮城県の仮設住宅内の子育てひろばを訪問したときに、「相談する人がいればいい」「ちょっとでいいから自由な時間がほしい」といった被災者の声を届け、一時保育のサービスはあっても待機者が多く、対応できていないのが現状ということを行政の立場からお話しして頂き、拠点事業に関わる皆さんがキーマンになって支援して欲しいという要望を頂きました。最後に、参加者一人一言感想を発表し、柴田さんよりニーズを捉えて活動を進めて欲しいことと、ガイドラインを参考にしてほしいことをメッセージにして終了しました。

◆プログラム4 全体会 (分科会総括・ディスカッション)

- 【コーディネーター】 浦川末子さん 長崎女子短期大学幼児教育学科 教授
【第1分科会】 野口美砂子さん NPO法人インフィニティー 理事長
【第2分科会】 奥山千鶴子さん NPO法人びーのびーの 理事長
【第1分科会】 柴田恒美さん NPO法人子育て談話室 理事長



浦川先生の進行で最初に各分科会のまとめと課題を発表して頂きました。第1分科会では野口さんより、人的な環境と物理的な環境の2つの面からグループワークを行い、人的な面からは「ようこそ」という迎える気持ちでの「挨拶」「安心」「信頼」「仲間」といったキーワード、物理的な面からは「衛生管理」「安全管理」「空間づくり」といったキーワード、いずれも「間」が大切であったこと、それらを踏まえ「地域にあるものをどう機能させていくか」の課題と報告をして頂きました。

第2分科会では奥山さんより、グループワークの中で出てきた3つの課題、「スタッフとコミュニケーションが取りにくい家庭への対応」「おしゃべりに夢中で我が子を見ていない親への対応」「子ども同士のトラブルに対して親にどう伝えるかの対応」について話し合い、センターの目的やルールを伝えていくことや、スタッフが親たちの輪の中に飛び込んでいくこと、親子遊びを振り話題を転換することなどの解決策が出たことや、背景を考えると、おしゃべりできるひろばを求められているのかもしれないという報告をして頂きました。

第3分科会では柴田さんより、少ない予算であっても同じ場所で、といったことを活かした運営など離島だからできること、商店街との連携など商店街だからできることの事例報告をして頂きました。

報告後は、会場とのディスカッションで浦川先生から「スタッフの役割、求められる力の苦しい状況はわかったが、手厚いケアを引き続きやって行くことは必要だろうかという視点はいかがか？」という質問に対して、会場から数名の方の意見を頂きました。また、専門家の意見として橋本先生より、利用者も社会を構成している一人。個々の存在を受け止めていくという役割を果たしていくと、利用者も安心して拠点を積極的に活用し始めること、「受け入れる」と「受け止める」を間違えると「弱者」として見てしまい、課題と言われる行動になってしまうというコメントを頂きました。また、会場からは、利用者でありながら、支援拠点の重要性を実感し支援する側になっている方の意見も頂きました。



浦川先生から最後に日本の子どもの状況と社会背景をお話しして頂き、コミュニケーションの大切さ、これからはいろいろな世代の人がいて、遠慮せずにお互いを高めていくエンパワメントが必要だという力強いメッセージで終了しました。

●終了挨拶

柴田恒美さん NPO法人子育て談話室 理事長